

氏 名	はなわ ろう せい 埴 狼 星
学位(専攻分野)	博 士 (理 学)
学 位 記 番 号	論 理 博 第 1411 号
学位授与の日付	平 成 15 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	コンゴ盆地西部熱帯雨林における地域社会編成に関する人類学的研究

論文調査委員 (主 査) 教授 西 田 利 貞 教授 田 中 二 郎 教授 山 極 寿 一

論 文 内 容 の 要 旨

コンゴ盆地の西部には、熱帯雨林における焼畑農耕と淡水漁撈を主生業とする西バントゥ系諸民族が居住している。これらの民族は、いわゆる「バントゥ・エキスパンション」によって熱帯雨林に移入して以来、移住と分散を繰り返し、この地域の森林環境に適応しつつ独自の社会と文化を作り上げてきた。また、彼らはピグミー系の狩猟採集民との間に経済的・社会的に密接な相互関係を築いてきた。申請論文は、これまでほとんど研究がなかった西バントゥ系焼畑農耕民の地域社会の編成について、生態人類学的手法を用いて分析をおこなったものである。コンゴ共和国北部モタバ川流域に住む焼畑農耕民ボバンダの社会を例にとり、彼らの社会が「家」に擬される同族的集団「ハウス」という基本単位から成っていることを示すとともに、「ハウス」の編成と彼らの自然環境利用との関係、およびピグミー系狩猟採集民アカとの関係を分析し、それらを通して展開される「ハウス」の動態を明らかにした。

主論文1では、地理的・社会的な辺境に位置し、断続的に移住者を受け入れてきたモタバ川流域を、制度的空白地帯としてのフロンティアと捉え、その社会と生態的特質を分析した。彼らの社会は、従来のリネージ(単系出自集団)・モデルではとらえることが難しいが、「ハウス」という概念を導入することによって理解が可能となる。「ハウス」は、その中に親子等の血縁者のほかにさまざまな成員を広く組み込んでいくという特徴をもつとともに、その中心には父に擬せられる人物が存在し、成員はその父の子という形で認識されるという、非常に柔軟な社会単位である。また、「ハウス」は土地を保有する単位でもある。モタバ川流域はスワンプが発達した地域であり、村はスワンプの中の孤島のような土地に形成される。このため、大きな人口を持つ村は形成されがたい。このような自然環境のもとでおこなう焼畑農耕と漁撈活動の分析から、彼らが森林を拓き生活空間を作っていくなかで、新しい「ハウス」を形成していく過程が明らかにされている。また、彼らの焼畑農耕や漁撈活動においては、狩猟採集民アカの労働力をいかに手に入れるのかということが、その成功の鍵を握っている。狩猟採集民との関係は単に経済だけではなく「ハウス」間の政治的な力関係にも影響し、また新たな「ハウス」の形成には、その「ハウス」のパートナーとなるアカの存在が必要である。これらのことから、フロンティアにおける社会編成の手段としての「ハウス」の存在と、農耕民と狩猟採集民との密接な関係が、西バントゥの多様な社会動態とその独自性を理解する重要な鍵となることを指摘した。

主論文2では、主論文1で示した「ハウス」の形成や発展と狩猟採集民との関係についての理解をさらに深めるために、農耕民ボバンダと狩猟採集民アカの社会的および経済的な相互交渉の分析をおこなった。まず、両者の間で用いられる呼称やイデオロムを検討し、ボバンダとアカの間における社会的不平等の存在について明らかにした。また、物資とサービスの授受(トランザクション)を中心とした相互交渉の分析から、このような両者間の関係が環境によって変化することを示した。ボバンダにとって森は先祖の生活の場であり、その先祖と自分たちの仲介役を果たすのが森についての知識を豊富に持つ狩猟採集民アカである。このような場では、ボバンダとアカとの間で親和的なトランザクションが生じるとともに不平等は顕在化しない。一方、村ではトランザクションが非親和的になるとともに不平等が直接的に現れる。このような平等と不平等の動態は「ハウス」の持つ構造的特性に起因している。「ハウス」は親子関係になぞらえて他人を取り込んでいくが、

親子関係には親和的な側面がある一方で、親と子の上下関係が強調されることもある。近代化により両者の関係はより不平等なものに変化しつつあると考えられるが、それでも両者が極端な対立や成層化に至らないのは「ハウス」という社会単位が両者の関係の基礎にあるためである。このような西バントウの「ハウス」をもとにした民族間関係の理解は、中部アフリカの自然社会における多民族共存のシステムの理解にとって不可欠な要素であるといえる。

論文審査の結果の要旨

アフリカ中央部の熱帯雨林に住む人々の社会に関しては、王国等の大規模な政体や狩猟採集社会の研究は少なくないものの、非階層的な焼畑農耕社会についての研究がきわめて少ない。申請論文は、長期の現地調査に基づいて、この地域の焼畑農耕社会を同族的な世帯集合である「ハウス」という社会単位を軸にして記載するとともに、「ハウス」の動態を農耕民の環境利用および狩猟採集民との関係から生態人類学的に分析したものである。

主論文1ではコンゴ共和国北部の焼畑農耕民ボバンダの社会編成に焦点を当てている。これまで、この地域の農耕民社会はリネージ（単系出自集団）モデルをもとに画一的に説明されることが多かった。しかし、申請者の調査で明らかになったのはこのモデルでは捉えきれない社会編成の柔軟性であり、申請者はそれを記述・分析するために、非血縁者でさえも擬制的な親子関係をもとに成員として取り込んでいく社会単位として、「ハウス」を用いた。「ハウス」は歴史言語学的な研究においてその存在が歴史的に想定されていたものではあるが、現在においてもそれが存在し、機能していることを実証したことの意味は大きい。また本論文は、「ハウス」がフロンティアにおいて特に重要な社会単位であることを、自然環境の利用や狩猟採集民との交換関係等に関する生態人類学的な分析から明らかにしている。この研究は単にボバンダ社会の理解にとどまらず、コンゴ盆地における民族間関係の動態や、この地域に広くみられる村落組織を理解する鍵を与えるものである。

主論文2では焼畑農耕民ボバンダと狩猟採集民アカとの社会的、経済的な相互交渉を詳細に分析している。農耕民と狩猟採集民との関係に関するこれまでの研究は、主に狩猟採集民の視点に立っておこなわれてきた。本論文では、主として農耕民から見た関係が分析されており、これまでの研究にはない新しい視点が示されている。とくに、農耕民側からの積極的な働きかけによって、狩猟採集民との間に不平等ではあるが擬制的な親子関係に基づいた関係が築かれていること、そのような両者の密接かつ両義的な関係が農耕民の「ハウス」の拡大過程において重要な役割を果たしていること、などを明らかにした点は大きな貢献といえよう。

以上のように申請論文は、長期のフィールドワークから得られた質的・量的に十分な実証的データに基づいて、これまでほとんど調査のなかったコンゴ盆地の辺境における農耕民の社会編成、及び農耕民と狩猟採集民との関係について新たな知見をもたらす研究である。

よって、本研究は博士（理学）の学位論文として価値あるものと認める。なお、主論文及び参考論文に報告されている研究業績を中心として、これらに関連した分野について諮問した結果、合格と認めた。